

参加動機が観戦意図へ与える影響についての検討  
ーテニスを事例としてー

**A study on the Influence of Participant Motivation on Spectating Intention in Tennis**

霜島広樹<sup>1)</sup>, 木村和彦<sup>2)</sup>

Hiroki Simozima<sup>1)</sup>, Kazuhiko Kimura<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

<sup>2)</sup> 早稲田大学スポーツ科学学術院

<sup>1)</sup> Graduate School of Sports Sciences Waseda University

<sup>2)</sup> Waseda University

キーワード: 観戦行動、参加動機、スポーツ参加者、テニス、重回帰分析

Key Words: Spectating Behavior, Participant Motives, Sport Participant, Tennis,  
Multiple Regression Analysis

**抄録**

本研究の目的は「テニスにおけるスポーツ参加動機とプロテニストーナメントへの観戦行動の関係を明らかにするためのモデルの構築」と、「モデルの検証を行うことで、テニス参加者をテニス観戦者へと導く方法についての示唆を得ること」であった。

テニスの参加者に焦点を当て、質的な手法にて仮説モデルを構築し、統計的な手法で仮説モデルの分析を行った。結果として、参加動機要因の「技術向上」と「自己尊重」が、観戦意図に影響を与えていることが示された。特に、「技術向上」に関しては観戦意図と強い関係性が確認されたことから、技術的に向上したいと思っている人は、プロの試合を見ることで自分の技術向上に生かしたいと考えている可能性が高いことが明らかとなった。わが国における多くのテニス参加者に対し、いかに技術向上に対して強く動機付けさせていくかが、観戦者増加への1つの方策として考えられる。

スポーツ科学研究, 10, 12-25, 2013 年, 受付日:2012 年 6 月 28 日, 受理日:2013 年 2 月 2 日

連絡先: 霜島広樹 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

e-mail: hirokisimozima@yahoo.co.jp

**I. 緒言**

21 世紀に入り、スポーツの世界にも様々な現象や問題が現れてきている。早川ら(1997)は、スポーツそのものの様相も、単に「する」だけのものから「する・みる」ものとして変化し、スポーツの考え方自体にも大きな変化が起こりつつあると述べている。

「みるスポーツ」、すなわち「スポーツ観戦」を対象とした研究は、わが国においても「スポーツ消費者行動」の研究分野で、観戦者についての理解を深める試みが数多く行われてきた。スポーツ観戦者に関する研究、すなわちスポーツ観戦行動に関する研究は、主にスポーツ消費者行動の研究領域において多くの関心を集め、これまでも

多くの科学的知見が蓄積されてきている(隅野ら, 2003)。スポーツ消費者とは、松岡(2010)によると、金銭的成本(料金など)および非金銭的成本(時間・労力など)費やしてスポーツを「する」または「見る」という形態で体験し、身体的および心理的ベネフィットの獲得を目的としてスポーツを消費する個人である。つまり、スポーツ観戦者とは、このスポーツ消費者の定義を「見る」に限定したものであると捉えることができる。佐野(2007)は、国内で開催される国際スポーツイベントに多くの観戦者が増加することで、経済面だけでなく競技の普及や振興の発展が強く期待されうると述べており、スポーツにおいて観戦者を増加させることには、単に経済的な便益に留まらない、大きな意味があると考えられる。

わが国における、具体的な観戦者人口に目を向けてみると、スポーツ白書(2011)によると、2009年において観客動員数が多かった球技系スポーツは、1位が野球の約2288万人であり、2位がサッカー(Jリーグ)の約962万人、3位がゴルフの約124万人(男子ツアー、女子ツアー、シニアツアーの合計)と続いている。これらの種目は、一定の観戦者数の確保に成功しているスポーツであると言えるだろう。その一方で、スポーツ白書(2011)において、テニス、バドミントン、卓球といった種目に関しては、観戦者数についての記載がそもそもなされていない。霜島ら(2010)が行った調査によると、テニス、バドミントン、卓球は、観戦者人口が極めて少ないという現状が指摘されている。具体的には、2009年度、わが国において観客動員数2万人以上を記録した大会に着目してみると、ゴルフはそのような大会が28大会存在しているのに対し、テニスは僅か2大会だけであり、バドミントンにおいては1大会のみ、卓球では1大会も存在しなかった(霜島ら2010)。

それに対して、「するスポーツ」、すなわちスポーツ参加(実施)の状況にも目を向けてみると、スポーツ白書(2011)のデータにおいて、年1回以上の種目別運動・スポーツ実施人口は野球が738万

人、サッカーは798万人、ゴルフは966万人であるのに対し、テニスは701万人、バドミントンは983万人、卓球は691万人とされており、観戦人口ほどの差は存在していない。加えて、ここで挙げた種目は、スポーツ白書(2011)のデータにおいて何れも上位であり、一定の参加人口を確保できているスポーツと言える。霜島・木村(2010)は、テニスやバドミントンといった参加人口は多いが観戦人口の少ないスポーツにおいては、参加者を観戦者へ繋げるような方策を検討することも重要であると指摘しており、そのスポーツを行わないものを観戦へ導くだけでなく、そのスポーツを行っているものを上手く観戦者へと誘導していくことも重要であると考えられる。

佐野(2007)によると、テニスの観戦者における満足度は80%と高く、リピーターが多く新規観戦者が少ないといった現象が指摘されている。このことから、観戦経験がないテニス参加者でも1度観戦に導くことができれば、継続的に観戦に訪れる、観戦におけるヘビーユーザーとなりうる可能性がある。以上のことから、スポーツ参加者を、如何にしてそのスポーツの観戦者へと導くかという研究は、参加者の人口は多いが、観戦者の人口は少ないスポーツにとって重要なテーマであると言える。

スポーツ参加者がスポーツ観戦へ興味を持つプロセスを解明するためには、スポーツ参加とスポーツ観戦の関係について詳細に検討していく必要があると考えられる。先行研究において、スポーツ参加とスポーツ観戦の関係について扱ったものとしては、最近ではTokuyama(2009)の研究が挙げられる。Tokuyama(2009)はMcDonald et al.(2002)の研究を基に、アメリカにおけるサッカーとテニスの参加者に調査を行い、スポーツ参加動機とCommitment to Watching(スポーツ観戦へのコミットメント)の関係性について述べている。Tokuyama(2009)によるとテニスへの参加者において、Self-Esteem、Aesthetics、Achievement、Affiliationなどのスポーツ参加動機はスポーツ観

戦へのコミットメントと正の相関関係があることが示唆されている。しかし、この結果においては、技術向上に関する動機である Skill Mastery とスポーツ観戦へのコミットメントには有意な相関が確認されておらず、これは「自分の技能を高めたり、スポーツに関する知識を深めたりするためにスポーツをみるという学習動機が、スポーツ観戦回数と関係がある」と述べた斉藤(1991)の研究と合致しないものである。ここから、Tokuyama (2009)における研究成果をアメリカとは異なる社会的・文化的背景を持つ日本に適用する上で、若干の相違が生じてくる可能性が想定される。

また、松岡ほか(2002)は日本のプロスポーツ観戦における観戦動機の構成要因として、知識(野球の技術を学んだり、知識を深めたりする)や技能レベル(選手の技能レベルの高いプレーを見て楽しむ)などの存在を指摘している。ここから、斉藤(1991)の指摘と同様に、技術向上を始めとするスポーツ参加動機と、スポーツ参加者における観戦行動には何かしらの関係性があることも覗える。八代ら(2002)も、観戦能力の高い観戦者はスポーツの本質的価値である技術や戦術といった部分に関心を集め、観戦することで自分の技能を高めるよう学習する傾向があることを指摘しており、スポーツ参加動機要因の一部は、スポーツ観戦行動に影響を与えている可能性が考えられる。

スポーツ消費者行動に関するレビュー研究を行っている吉田(2011)は、今後の研究課題として、スポーツ参加動機要因が消費行動などの目的変数に及ぼす影響を明らかにすることの必要性を指摘しており、スポーツ参加動機とスポーツ観戦行動の関係性を明らかにすることは学術的にも意義があるといえよう。以上のことから、スポーツ参加動機とスポーツ観戦行動や観戦意図の関係性について検討することは、スポーツ消費者行動研究の発展へ大きく貢献するものであると考えられる。

## II. 研究目的

本研究では、スポーツ参加とスポーツ観戦の関係性を明らかにする上で、わが国におけるテニスに着目した。緒言でも述べられたように、テニスは、参加者は多いが観戦者は少ない代表的なスポーツであり、スポーツ参加者をスポーツ観戦者へ導く方法について検討する上で、適切なスポーツであると考えられた。

以上より、本研究の目的を、研究その 1 では「わが国のテニスにおけるスポーツ参加動機の構成を図った上で、スポーツ参加動機とスポーツ観戦行動の関係を明らかにするための仮設モデルを作成すること」とし、研究その 2 では「研究その 1 で作成したモデルの検証を行い、テニス参加者をテニス観戦者へと導く方法についての示唆を得ること」とした。

なお本研究においては、プロテニストーナメントは、日本国内で代表的なプロトーナメントである「楽天ジャパンオープン」、「東レ・パンパシフィックオープン」に限定し、プロトーナメント観戦を「楽天ジャパンオープン、もしくは東レ・パンパシフィックオープンを試合会場で直接観ること」とした。

## III. 研究その 1

### 1. 参加動機の構成

先行研究における参加動機の構成であるが、Tokuyama (2009)、McDonald et al.(2002)によると、Sport Motivation (スポーツ参加動機)は、「Risk-Taking」「Stress Reduction」「Aggression」「Affiliation」「Social Facilitation」「Self-Esteem」「Competition」「Achievement」「Skill Mastery」「Aesthetics」「Value Development」「Self-Actualization」「Physical fitness」の 13 の要因から構成されている。上述した先行研究における、スポーツ参加動機要因の定義は英文であったため、ネイティブスピーカーであるスポーツ科学を専門とする研究者と共に翻訳を行い、表 1 に示した。

表 1 スポーツ参加動機の構成と定義

スポーツ参加動機要因	定義
リスク獲得	活動を通して、スリルを求めたいという欲求
ストレス解消	心配、恐怖、緊張を和らげたいという欲求
攻撃性	活動を通して攻撃的な気持ちを和らげたいという欲求
所属	自分自身を特別なグループに属させていたいという欲求
交流	家族、友人、仕事仲間と共に、より時間を過ごしたいという欲求
自己尊重	自分自身に高い敬意を抱きたいという欲求
競争	他者との関係において、人の能力を測り、競争したいという欲求
達成	他のことを通じて、求める結果を達成したいという欲求
技術向上	可能な限り良いパフォーマンスをしたいという欲求
美的	スポーツの美しさ、優雅さ、他の芸術的特徴を追求したいという欲求
価値発達	誠実さ、品性、思いやりを学び、作り上げたいという欲求
自己実現	スポーツにおいて、自分の可能性を実現し、それを果たしたいという欲求
健康・体力作り	健康を感じたり、筋力をつけたり、体型を良くしたり、身体的強さを得たいという欲求

## 2. インタビュー調査

研究目的を達成するために、研究その1では、テニス参加者を対象にインタビュー調査を行うこととした。インタビュー調査は、2010年5月4～5日に、東京都Tテニスクラブにおけるテニス参加者、そして埼玉県S公共テニスコートにおけるテニス参加者に対して行った。

インタビュー方法は構造化面接法によって行い、質問内容は「過去に楽天オープン(旧AIGジャパンオープン)、東レ・パンパシフィックオープンへ観戦に行った経験があるかどうか」「(観戦行動があるのであれば)観戦にいった動機、理由」「(観戦行動がなければ)観戦に行かなかった動機、理由」「現在、テニスを行っている動機」についてであった。取得したデータは対象者の許可を得た上で、その場でフィールドノートに記録した。インタビュー調査の結果、74人からデータが取得できた。内訳としては、Tテニスクラブにおけるテニス

参加者が60人、公共テニスコートでのテニス参加者が14人であった。

## 3. 分析方法

インタビュー調査から得られたデータを、KJ法(川喜田,1967)を用いて分析した。KJ法は、多くの断片的データを統合し、核心となる要因を抽出できるという点において優れており、この手法は予備調査のデータを纏める上で適した方法であると判断した。

KJ法を使ってインタビューデータを分析した堀ら(2011)の研究を参考にして、まず、スポーツ科学を専攻する大学院生と共にフィールドノートに記載された内容を精読し、文脈を整えた上で意味のある文章に分割した。これらの中から、予備調査の目的に関連するものを拾い出してコード化し、用意されたカードにペンで記入した。次に、これらの中で意味の近いカード同士を集め、グルー

プ化を行った。この各々のグループの意味するところを「上位カテゴリー」として分類し要約した。

#### 4. 分析結果

分析の結果、「現在、テニスを行っている動機」については、115 のコードが抽出された。表 1 を参

考にしながら、得られたコードから上位カテゴリーの作成・命名を行った。結果、【達成】【技術向上】【自己尊重】【交流】【価値発達】【ストレス解消】【自己実現】【競争】【美的】【健康・体力作り】【所属】の 11 の上位カテゴリーが形成された(表 2)。

表 2 KJ 法から抽出されたカテゴリー (テニス参加への動機)

上位カテゴリー	代表的コード
達成	目標を達成したい
	達成感がある
自己実現	打ち込めるものがないと腐っていきそう
価値発達	人間的なことを学び、人として成長できる
ストレス解消	ストレスを発散させるため
	気持ち良く帰りたい
美的	恰好よく決めたい
交流	コミュニケーションツールとして
	友達が増える
競争	人と競える
	競争とか勝負事として楽しい
	試合に出るのが好きで、そのために練習
自己尊重	周りの人に褒めてもらえる
	試合で勝ってランキングを上げることが自分のステータスになる
所属	テニスへ走っている事で普通の人とは違うと思える
技術向上	上手になりたい
	レベルアップしたい
	変化してくるボールへの反応
	試合に出るようになり、それに向けての上達のため
健康・体力作り	健康のため
	体力向上
	外見的に恰好良くなりしたい

一方で、「テニス観戦に行った動機」については、60 のコードが抽出された。これらのコードから、

【選手】【雰囲気】【交流】【逃避】【学習】の 5 つの上位カテゴリーが形成された(表 3)。

表 3 KJ 法から抽出されたカテゴリー (観戦への動機)

上位カテゴリー	代表的なコード
交流	テニスで盛り上がる
	家族サービス
選手	フェデラーと錦織が見たかった
	トッププレイヤーを見たい
	海外の選手を見たい
雰囲気	生で見るのは迫力あるし、雰囲気も臨場感がある
	雰囲気が好き
逃避	妻から逃げている
学習	良いイメージを貰いに行く
	上手い人がやっているのを見ると自分も上手くなった気がする
	自分のレベルとプロのレベルを比較できる
	上手い人のプレーを見て参考にしたい
	自分のテニスに生かしたい
	技術の向上や刺激を受けたい

#### IV. 考察(研究その1)

##### 1. テニスへの参加動機について

KJ 法による分析の結果(表 2)、テニスを行っている動機に関しては 11 の上位カテゴリーが抽出された。11 の上位カテゴリーを、McDonald et al. (2002)の提示するスポーツ参加動機と照らし合わせた所、ストレス解消、所属、交流、自己尊重、競争、達成、技術向上、美的、価値発達、自己実現、健康・体力作りの動機は確認できた。しかし、「攻撃性」、「リスク獲得」に関してはインタビュー調査の結果からは抽出されなかった。インタビュー調査を続けることで「攻撃性」、「リスク獲得」が確認される可能性もあるが、74 名へインタビューから「攻撃性」、「リスク獲得」に関するコードが1つも確認出来なかったことを考えると、「攻撃性」、「リスク獲得」を強い参加動機としているテニス参加者は日本においては少ないと考えられた。よって、今回の研究では、参加動機には「攻撃性」、「リスク獲得」は含まれないとして、論を進めることにした。

##### 2. 分析モデルの作成

KJ 法による分析結果から(表 3)、「テニス観戦に行った動機」として【学習】というカテゴリーが抽出された。【学習】を構成するコードは60のうち19と大半を占めており、具体的には「上手い人のプレーを見ることで自分のプレーに生かしたい」といったものであった。ここから、緒言でも触れた先行研究同様、「技術向上」などの参加動機と観戦行動には何らかの関係性があると考えることが可能であった。

そこで、前述した内容を踏まえ「テニス参加者の参加動機要因は観戦行動に影響を与えている」ということを説明するモデルを作成した。大西ら(2008)によると、スポーツ観戦行動の研究領域において、観戦意図は観戦行動を予測する主要因であり、Ajzen and Driver(1992)の先行研究からもその重要性が報告されているという指摘があることから、モデルにおける観戦行動には、行動への意図である「観戦意図」を使用することとした。

なお本研究においては、研究目的でも述べたように、プロテニストーナメントを、日本国内で代表的なプロトーナメントである「楽天ジャパンオープン」、「東レ・パンパシフィックオープン」に限定している

ことから、本研究における観戦意図は、「楽天ジャパンオープン」、「東レ・パンパシフィックオープン」への観戦意図とした。

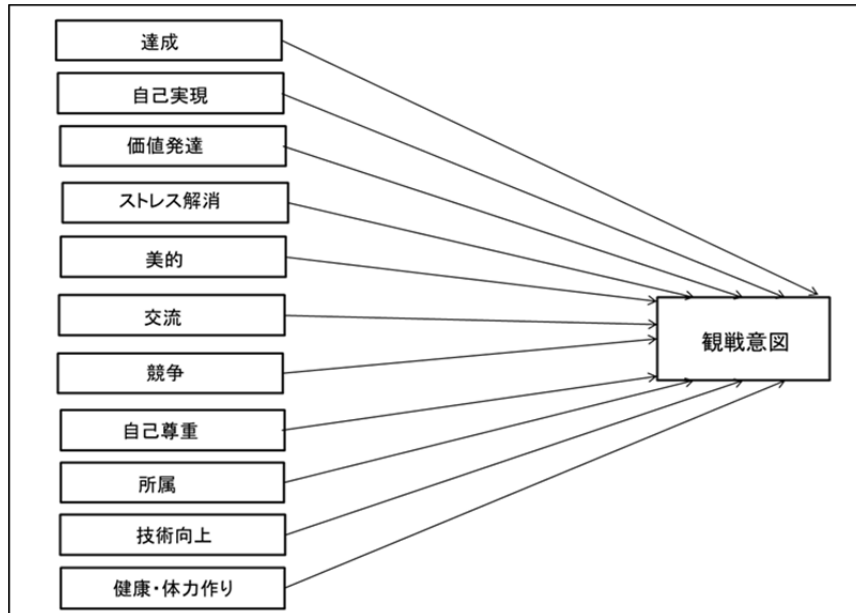


図 1 仮設モデル

## V. 研究その2

### 1. 質問紙の作成

研究その1で作成した仮設モデルの分析を行うため、研究その2では質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、「基本的属性(性別、年齢、テニスへの参加頻度)」、「テニスへの参加動機」、「テニストーナメントへの観戦意図」から構成された。

参加動機については、Tokuyama(2009)、McDonald et al.(2002)の研究で使われた質問紙、および研究その1の結果を踏まえて構成した。彼らの使用した質問紙は、英語表記であったため、前述した参加動機の定義に沿うよう、慎重に和訳を行った。スポーツマネジメントを専攻する大学院生数名と共に、意味が分かりにくい点があるかどうかを確認し、問題がある部分は修正を行った。そして、観戦意図尺度に関しては、大西ら(2008)の使用したスタジアムでの観戦意図を参考に作

成した。具体的には、大西ら(2008)の使用した尺度を、日本における代表的なプロトーナメントである東レ・パンパシフィックオープン、楽天ジャパンオープンに置き換えた上で、スポーツマネジメントを専門とする教員1名とスポーツマネジメントを専攻する大学院生数名で、質問項目の妥当性について検討した。その結果、日本における代表的なプロテニストーナメントへの観戦意図として、「あなたはトップ選手の集まる、東レ・パンパシフィックオープン、もしくは楽天ジャパンオープンといったテニスのプロトーナメントを試合会場で観戦してみたいと思いますか」という項目(7段階リッカート尺度)が設定された。

### 2. 調査期間・調査場所

調査は、2010年度の東レ・パンパシフィックオープン、並びに楽天ジャパンオープン終了後の、2010年10月11日から11月11日の期間に行

われた。

また、質問紙の配布に関しては東京都 T テニスクラブにて行った。配布は、筆者の自己紹介をした上で回答はその場で行ってもらい、記入終了後は速やかに回収を行った。記入に関する疑問点、記入漏れなどの不都合が生じた場合は、筆者がその場で対応した。回答者の都合で、どう

しても記入が難しいものに関しては、後日改めて回収を行った。

### 3. 分析結果

#### 1) サンプルの基本的属性

調査の結果、得られたデータの基本的属性を表に示した。

表 4 サンプルの基本的属性

	n	%
性別		
男性	86	50.6
女性	84	49.4
年齢		
10 代	17	10.0
20 代	34	20.0
30 代	45	26.5
40 代	45	26.5
50 代	14	8.2
60 代以上	15	8.9
活動頻度		
週 1 回	70	41.2
週 2 回	32	18.8
週 3 回	20	11.8
週 4 回	16	9.4
週 5 回以上	32	18.8

調査では 172 の質問紙が回収され、有効サンプル数は 170 であった。性別に関しては、男女ともほぼ同数の結果となった。年代に関しては、30、40 代が多く、テニスへの参加頻度に関しては、週 1 回が全体の半分近くを占めていた。

#### 2) 参加動機尺度の妥当性と信頼性の検討

質問紙で使用した参加動機に関する項目は、元々英文であったものを日本語訳したものであったため、尺度の妥当性、信頼性の検討を行う必要があった。そこで、スポーツ観戦における経験価値尺度の妥当性と信頼性の検討を行った齊

藤ほか(2010)の手続きを参考に、参加動機尺度の妥当性と信頼性の検討を行った。まず、Amos18.0 を用いた確認的因子分析を行った上で、収束的妥当性および弁別的妥当性を検討するために、因子負荷量 (Factor Loading)、AVE (average variance extracted)、相関係数を分析した。また、尺度の信頼性は Cronbach  $\alpha$  係数により検討した(表 5・6)。

まず、確認的因子分析であるが、一般的にモデルの適合度指標は GFI、AGFI、CFI、RMSEA の値によって検討される(小塩, 2008)。しかし、田部井(2001)によると、観測変数が 30 以上ある



モデルの場合、GFI の値は基準値である.900 を超えないことが指摘されており、その場合は CFI を用いることが推奨されている。また、RMSEA に関しては、一般的には.05 が基準として用いられるが(小塩, 2008)、田部井(2001)によると、.05 から.08 の場合には穏当な適合度、.08 から.10 の場合にはやや劣る適合度であるという指摘もあり、以上のことを踏まえた上でモデルのあてはまりについて検討を行った。分析の結果、CFI は.903、RMSEA は.064 となり、一定のあてはまりの良さが確認された。

次に収束的妥当性と弁別的妥当性の検討で

あるが、各変数 AVE を.50 以上を基準(Fornell and Larcker,1981)に妥当性の検討を行った結果、全ての変数において基準を上回る結果となった。したがって、構成概念の収束的妥当性を有していることが示された。また、弁別的妥当性の検討を行うため、因子間の相関係数の 2 乗と各因子間の AVE を比較した。結果、「達成と価値発達」、「達成と競争」の間では弁別的妥当性は確認されなかったものの、それ以外の因子の AVE は他の因子との相関係数の 2 乗より高い値を示したことから、それらの弁別的妥当性を確認することができた。

表 5 テニス参加動機の因子相関行列

	達成	自己実現	価値発達	ストレス解消	美的	競争	自己尊重	交流	所属	技術向上	健康・体力作り
達成	1.00										
自己実現	.69	1.00									
価値発達	.81	.66	1.00								
ストレス解消	.42	.43	.40	1.00							
美的	.69	.61	.70	.38	1.00						
競争	.74	.66	.63	.41	.64	1.00					
自己尊重	.61	.62	.49	.25	.56	.64	1.00				
交流	.61	.51	.56	.38	.56	.55	.38	1.00			
所属	.70	.57	.62	.43	.59	.58	.61	.65	1.00		
技術向上	.67	.49	.64	.31	.69	.63	.60	.54	.65	1.00	
健康・体力作り	-.030	.061	.033	.40	-.056	-.034	-.14	.18	.13	-.007	1.00

表 6 テニス参加動機の因子項目の信頼性と妥当性

	項目	$\alpha$	FL	Ave
達成	1 テニスをすることは、自分に人としての成長を与えてくれると思う		.79	
	3 テニスをすることは、何か物事を達成する手助けとなると思う	.80	.80	.58
	16 テニスをすることは、自分の限界への到達に繋がると思う		.70	
自己実現	2 テニスをすることによって、「自分ほうまくいっている人間だ」と感じられる		.78	
	6 テニスをすることで、自分の能力に自信を持つことができる	.89	.89	.74
	10 テニスをすることで、自信を感じられるようになる		.90	
価値発達	4 テニスをすることで、思いやりのある人間になれる		.76	
	5 テニスをすることで、努力や熱意の大切さを理解することができる	.81	.83	.60
	9 テニスをすることで、他からは学べないことを学ぶことができる		.73	
ストレス解消	8 テニスをした後は、する前よりストレスが軽くなっている		.74	
	12 テニスをすることで、日々のプレッシャーから解放されることができる	.77	.79	.54
	18 テニスは、落ち込んでいたり、イライラしている時に最適である		.67	
美的	13 テニスをすることは、自分自身を表現する 1 つの方法である		.83	
	14 テニスのプレーには美しさがあると感じる	.79	.54	.50
	17 私はテニスのプレーに、自分の個性・性格を表現している		.79	
	20 私は、テニスのプレーにおける芸術性の追求を楽しんでいる		.64	
競争	7 テニスをしていると、負けず嫌いになる		.70	
	11 対戦相手が強ければ強いほど、私はテニスを楽しむことができる	.76	.63	.51
	19 競争は、自分がテニスに参加する上での、重要な要素の 1 つである		.81	
自己尊重	23 私のテニスにおける目標は、テニスで突出した存在になることだ		.79	
	24 私は、テニスで結果を出したいという強い願望を持っている	.85	.87	.66
	29 私はテニスでの成功者になるために、年間を通して努力しつづけるつもりだ		.77	
交流	22 テニスへの参加は、自分の友人達と時間を共有する機会を与えてくれる		.63	
	27 新たな出会いのチャンスを与えてくれるのが、テニスをする楽しさでもある	.81	.73	.51
	30 テニスの楽しさは、他の人々とテニスをした経験を共有できることだ		.75	
	38 グループでのテニス参加は、社会的な関係を良好にさせることへと繋がる		.74	
所属	25 テニスをしていると、自分は特別な集団に属していると感じられる		.55	
	33 私は、テニスをする人々との間に、何か絆のようなものを感じる	.75	.85	.55
	35 テニスをする人々の中には、ある種の仲間意識のようなものが存在する		.79	
技術向上	28 自分の目標を達成するため、高い技術を身につけたいと思っている		.75	
	32 マスターするのが難しい点が、テニスをプレーする面白さでもある	.79	.79	.56
	34 マスターするのが難しいので、テニスをすることは常にチャレンジである		.71	
健康・体力作り	26 私がテニスをするのは、健康維持のためである		.88	
	31 体力(筋力、持久力、抵抗力)を向上させたいので、私はテニスをしている	.88	.74	.73
	37 私がテニスをするのは、テニスが健康に良いと感じるからである		.90	

さらに、信頼性の検討を行った所、Cronbach  $\alpha$  係数は、全ての因子に関して.707 (Nunnally, 1978)を超える結果となり、一定の信頼性を有していることが示された。

以上より、参加動機の信頼性と妥当性の検証の結果、妥当性に関しては検証する余地がある結果となったものの、一定の信頼性が確認され

た。

### 3) 仮説モデルの統計的分析

質問紙調査で得られたデータを用い、石村 (2006)を参考に、SPSS18.0 による重回帰分析にて仮説モデルを分析した。分析結果は以下の図 2 に示した。

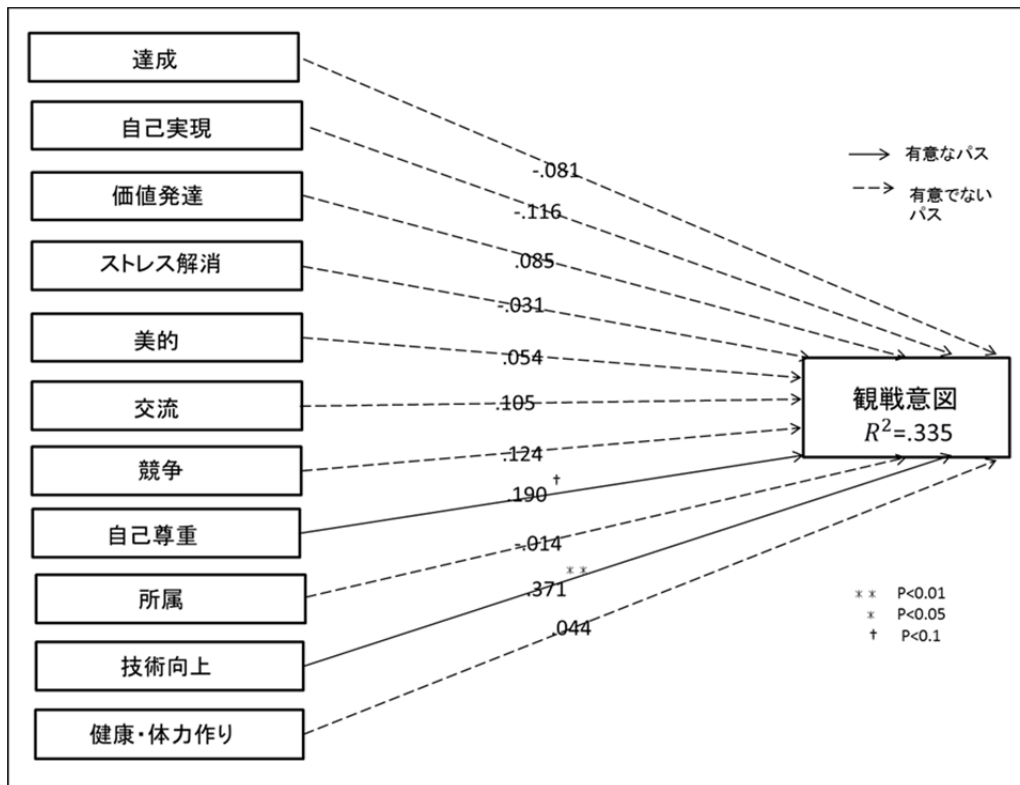


図 2 仮説モデル分析結果

重回帰分析の結果、技術向上と観戦意図のパスが 1%水準で統計的有意性が確認された。また、自己尊重と観戦意図のパスに 10%水準で統計的有意傾向が確認された。それ以外のパスには有意性は確認されなかった。そして、モデルの説明力を示す調整済み  $R^2$  の値は 0.335 となり、このモデルから観戦意図の 33.5% が説明されたことになった。また、求めた重回帰式の予測力に関する検定であるが、有意確率が基準値である 0.05 を下回ったことから、このモデルから予測は可能であることが示された(石村, 2006)。

なお、重回帰分析においては、小塩(2004)の指摘するように多重共線性の問題が考えられるが、この問題を診断する上で指標になる VIF の値を算出した所、全ての参加動機要因において VIF は基準値である 10 未満となった。これより、多重共線性は発生していないことが確認された。

### VI. 考察(研究その 2)

テニス参加者をテニス観戦者へと導く方法についての示唆を得るため、研究その 2 では、研究その 1 で作成した仮説モデルの検証を行った。

まず、参加動機尺度の妥当性と信頼性についてであるが、確認的因子分析と、因子負荷量、AVE、相関係数の算出から検討を行った。確認的因子分析の結果と、因子負荷量、AVE、相関係数の値より、一定の妥当性と信頼性が確認された。

そして、モデルの分析結果から、参加動機要因が観戦意図へ与えている影響について着目すると、「技術向上」と「自己尊重」が観戦意図に影響を与えていることが確認された。一方で、その他の参加動機要因に関しては、観戦意図との間に統計的有意性は確認できなかった。この結果から、「技術向上」と「自己尊重」の参加動機の強さを向上させることが、観戦意図の向上には重要であるということが示唆された。特に、「技術向上」に関しては観戦意図と強い統計的有意性が確認されたことから、技術的に向上したいと思っている人は、試合でプロの技術を直接見ることで、自分の技術向上に生かしたいと考えている可能性が高いといえる。テニス参加者は、本研究でも述べたように11のテニスへの参加動機要因を、様々な程度でそれぞれ持ち合わせていると考えられるが、その中でも、いかに技術向上の動機をより強く持たせることができるかが、観戦者増加への鍵と言えるだろう。

## Ⅶ. 結論(研究の限界と今後の課題)

本研究では、わが国のテニスにおける参加動機と観戦行動の関係を明らかにし、テニス参加者をテニス観戦者へと導く方法についての示唆を得るといった研究目的を達成することで、スポーツマネジメントの研究の蓄積に貢献することが出来たが、幾つかの研究上の問題点も浮き彫りとなった。

まず、本研究では、テニス観戦を「楽天ジャパンオープン、もしくは東レ・パンパシフィックオープンを試合会場で直接観ること」と定義して論を進

めてきたが、このことから、本研究の知見は、上記2大会のような規模の大きい大会にしか適用できない可能性がある。テニスなどのスポーツにおいては、そのような大規模な大会を開催出来ないこと自体に、観戦者が少ない原因が存在する可能性もあり、より小規模な大会に対しても本研究の知見が適応可能かどうかについては、今後研究が必要である。また、本研究で得られた知見がテニス以外のバドミントンや卓球といったスポーツにも適用できるかどうかといった点も今後の研究が求められる。

さらに、モデルの検証の結果、調整済み  $R^2$  の値が 33.5%であったことや、テニスにおけるスポーツ参加動機尺度の妥当性についても課題が残ったことから、モデルを再構築した上で検討を重ねていくことが今後の研究課題として挙げられる。

最後に、本研究では「参加者をいかにして観戦者へ導くか」といったテーマを中心に論を展開してきたが、母集団の大きさという点においては、テニスを行っていない「非参加者」の方が圧倒的に多いと考えられる。したがって、「テニスを行っていない者をいかにして観戦者へと導くか」といった研究も今後求められると言えるだろう。

## 参考文献

- Ajzen, I and Driver, B. L.(1992) Application of the theory of planned behavior to leisurechoice, Journal of Leisure Research, 24, pp. 207-224.
- 大西孝之・原田宗彦(2008) プロスポーツチームが行う地域貢献活動の消費者に与える影響:大学生のチーム・アイデンティフィケーションと観戦意図の変化に注目して, スポーツ科学研究, 5, pp.253-268.
- Fishbein, M. and Ajzen I.(1975) Belief, attitude, intension, and behavior : An introduction to theory and research, Reading

- MA, Addition-Wesley.
- Fornell, C., and Larcker, D.(1981) Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error, *Journal of Marketing Research*, 18(1), pp.39-50.
  - 早川武彦・ジャンボ鶴田(1997) 対談 多様化するこの社会とスポーツ, 無限大, 11月号, pp.14-39 日本 IBM, 東京.
  - 堀百合子・清水房枝(2011) 血液センター看護師の就業継続の要因について, *三重看護学誌*, 13, pp.41-51.
  - 石村貞夫(2006) SPSS による多変量データ解析の手順[第 3 版], 東京図書株式会社, 東京.
  - 川喜田二郎(1967) 発想法 : 創造性開発のために, 中央公論新社, 東京.
  - Mark A. McDonald, George R. Milne, and JinBae Hong(2002) Motivational Factors for Evaluating sport spectator and participant Markets, *Sports marketing Quarterly*, 11, pp.100-113.
  - 松岡宏高・藤本淳也・James,Jeffrey(2002) プロスポーツの観戦動機に関する研究 I :観戦動機の構造と測定尺度の開発, *日本体育学会大会号*, 53, p.379.
  - 松岡宏高(2010) スポーツマネジメントの概念の再検討, *スポーツマネジメント研究*, 2(1), pp.33-45.
  - Nunnally, J. C.(1978) *Psychometric Theory* (2nd ed.), McGraw Hill, New York.
  - 小塩真司(2004) SPSS と AMOS による心理・調査データ解析-因子分析・共分散構造分析まで, 東京図書株式会社, 東京.
  - 小塩真司(2008) はじめての共分散構造分析 : AMOS によるパス解析, 東京図書株式会社, 東京.
  - Riddle, P.K.(1980) Attitudes, beliefs, behavioral intentions, and behaviors of women and men toward regular Jogging, *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 51 (4), pp.663-674.
  - 斉藤れい・原田宗彦・広瀬盛一(2010) スポーツ観戦における経験価値尺度開発および J リーグ観戦者の分類, *スポーツマネジメント研究*, 2(1), pp.3-17.
  - 斉藤隆志(1991) 観戦行動の分類と要因 : スポーツイベント経営の視点から, *筑波大学体育科学系紀要*, 14, pp39-53.
  - SSF 笹川スポーツ財団(2008)スポーツライフデータ 2008, SSF 笹川スポーツ財団, 東京.
  - SSF 笹川スポーツ財団 (2011) スポーツ白書:スポーツが目指すべき未来, SSF 笹川スポーツ財団, 東京.
  - 佐野昌行(2007) 国際スポーツイベント観戦者の基礎的特性に関する研究, *日本体育大学紀要*, 36(2) pp.231-248.
  - 佐野昌行(2008) スポーツイベントの観戦動機とその要因に関する研究 : 国際スポーツイベントに着目して, *日本体育大学紀要*, 37(2), pp.83-95.
  - 霜島広樹・木村和彦(2010) テニス実施者の観戦行動に関する研究(その 1) : スポーツ観戦行動における文献レビューから, *日本体育スポーツ経営学会大会号*, 33, pp.47-48.
  - 隅野美砂輝・原田宗彦(2003) スポーツ観戦者行動における感情に関する研究動向, *スポーツ産業学研究*, 3(2), pp.1-11.
  - 田部井明美(2001) SPSS 完全活用法 : 共分散構造分析 (Amos) によるアンケート処理, 東京図書, 東京.
  - Tokuyama Sagatomo(2009) Examining different characteristics in consumer motivation for participant sport and spectator sport, *Doctoral Thesis, College of Education*

- and Human Development University of Louisville.
- 八代勉, 中村平(2002) 体育・スポーツ経営学講義, pp.85-88, 大修館書店, 東京.
  - 吉田政幸(2011) スポーツ消費者行動: 先行研究の検討, スポーツマネジメント研究, 3(1), pp. 5-21.